

〔資料〕

「ダーウィン」からなにを読み解くか

飯 島 滋 明

名古屋学院大学経済学部

What Should We Learn from Darwin?

Shigeaki IJIMA

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

第1章：はじめに

私はかつてから「ダーウィン」という地にも関心を持っていた。というのも、1942年2月19日、日本軍はダーウィンを空襲したが、その記憶を呼び起こす展示物などがダーウィンのいたる所に存在すると聞いたことがあるからだ。そのために反日感情が完全におさまっているわけでもなく、2007年にダーウィンで日本人が卵を投げつけられたという話も聞いたこともある。毎年2月19日にはダーウィンで空襲式典が開催されているとも聞いた。

話は変わるが、日本国憲法では「国際協調主義」が基本原理とされている（憲法前文、98条2項）。「国際協調主義」については、かつて私は「世界平和の実現のために、日本が積極的な役割を果たすこと」とともに、「かつての日本のような独善的な態度を改め、他国のことを尊重しながら国際社会で行動すること」と紹介したことがある¹⁾。後半の部分については、憲法前文では「いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」という文言で示されている。たとえ歴史の中で悲惨な出来事があったとしても、そうした悲惨な歴史に真摯に向き合うのでなければ「自国のことのみに専念して他国を無視」することになりかねない。ひいては外国との間に真の信頼関係を築くことへの支障となる。憲法前文にある、「国際社会において名誉ある地位」を占めることもできなくなる。それでは憲法の基本原理である「国際協調主義」の実践に水を差すことになる。そこで本稿ではダーウィンの地で窺うことができる、日本とオーストラリアの歴史を直視し、そこからどのような教訓を引き出すべきなのかを考えてみたいと思う。

第2章：ダーウィン空襲の痕跡

(1) ダーウィン中心部にある「ダーウィン空襲」を紹介するパネル

きれいな海辺の近くにある、ダーウィン中心部。ダーウィン中心部はそれほど大きくない。ショッピングモールにはお土産を売る店や食事ができる場所、日本のすしを提供するお店もあった。そうしたショッピングモールのなかに、【写真1】【写真2】のようなパネルがある。

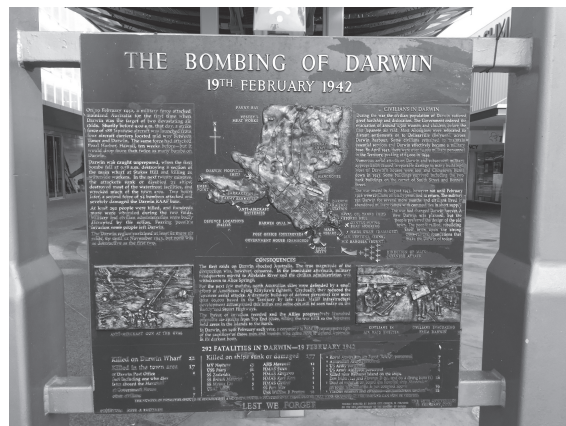
このパネルには、「1942年2月19日、オーストラリア本土がはじめて軍により攻撃を受けた」、「10週間前にハワイの真珠湾を空襲した部隊と同じ部隊がダーウィンを空襲したが、ハワイに投下した2倍以上の爆弾をダーウィンに投下した」、「2月19日の2回の空襲で、少なくとも292人が犠牲者となり、数百人が負傷した」、「ダーウィン地域はその後、1943年11月12日まで少なくとも62回の空襲を受けている」、「最初の爆撃はオーストラリアに衝撃を与えた」などと記されている。

また、日本軍が攻撃する経路や地理が紹介されているもの（【写真2】中央の上の部分）、対空砲で応戦する兵士の様子を紹介する絵（【写真2】左側真ん中）、防空壕に隠れたり、逃避する市

1) 榎澤幸広・奥田喜道・飯島滋明『これでいいのか！ 日本の民主主義 失言・名言から読み解く憲法』（現代人文社、2016年）79頁。



【写真1】ダーウィン中心部にある、2月19日の空襲の様子を紹介したパネル。



【写真2】上掲【写真1】を拡大したもの。

民の様子を紹介する絵（【写真2】右側真ん中）が掲載されている。

そして、このパネルの一番下の部分には、「忘れまじ LEST WE FORGET」と記されている²⁾。

(2) 軍事博物館（DARWIN MILITARY MUSEUM）

ダーウィンの中心部からタクシーで20～25ドルの場所、そこには「軍事博物館」がある。

この軍事博物館には、【写真3】のように、朝鮮戦争に関する展示物、さらにはベトナム戦争に関する展示もある。ただ、ここでメインとなっているのはやはり第2次世界大戦時にかかわる事柄である。【写真4】では、日本がどのように海外を侵略したかの地図が紹介されている。

また、軍事博物館の説明文には、英語と共に日本語も記載されている場合がある。その日本語

2) 「忘れまじ LEST WE FORGET」の訳については、鎌田真弓「記憶の国境線を問う」鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争』（御茶の水書房、2012年）39頁の訳に従った。



【写真3】 軍事博物館にある，朝鮮戦争を紹介する看板。



【写真4】 軍事博物館にある掲示物。

の説明文では，日本軍がダーウィンを攻撃した理由について，「第2次世界大戦中に，日本軍大本営は，連合国軍が東南アジアにおける日本軍の勢力拡大と覇権を妨害するのを阻止するために，その戦略の一環として，まず，ポート・ダーウィンに避難している連合国海軍の脅威を取り除き，次いで，ポート・ダーウィンそのものを無力化する必要があると決定した」と紹介されている。

ほかのパネルでは，「ダーウィンは重要な連合軍基地であった。オーストラリア北部の海岸部で主要な港と攻撃機施設があるのはダーウィンだけであった。このことは，ダーウィンがオランダ領東インドネシアを占領している日本軍にとって戦略的脅威となることを意味している。日本軍は，港，空軍基地，そして中継点としてのダーウィンを無力化する計画を実施した」とも紹介されている。この博物館では，「2月19日の2回の空襲で251人が殺された」と紹介されている。

(3) 第74回ダーウィン空襲式典

2月19日にダーウィン空襲式典が行われることは、2, 3日前のテレビや新聞でたびたび報じられていた。そして2016年2月19日、私は海岸近くの戦争記念碑付近で行われた、第74回ダーウィン空襲式典に参加した。

ダーウィンはかなり暑く、参加者の多くはうちわのようなもので顔をあおぎながら参加していた。学校に通う子どもたちも多く参加していた。『ノーザンテリトリーニュース』2016年2月20日付によると、約2700人が第74回ダーウィン空襲式典に参加した。この新聞には、ノーザンテリトリー州にある学校の生徒が献花する様子、アメリカ海兵隊隊員が式典に参加している様子、オーストラリア軍人が参加している様子を撮影した写真が掲載されている。空砲対策のため、式典参加者にはパンフレットだけではなく、耳栓も配られていた。空砲が鳴ると、あたりは赤や黄



【写真5】 海岸近くにある、ダーウィンの「戦争記念碑」(Cenotaph)



【写真6】 戦争記念碑



【写真7】 2016年2月19日の戦争記念碑。



【写真8】ダーウィンのいたるところに掲示されている、2月19日の空襲を知らせる旗。



【写真9】ダーウィンのいたるところに掲示されている、2月19日の空襲を知らせる旗。

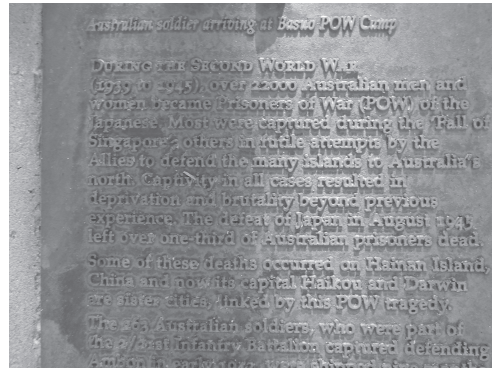
色の煙で覆われ、子どもたちも大きな声を上げていた。なお、「若い世代が戦争の歴史から学び、その知識を活用して平和な未来を築くことを望む」という、ダーウィン市長のメッセージが記されたパンフレットが配布された。2月19日の2、3日前の様子とは異なり、19日には【写真7】のように、多くの花が添えられていた。

(4) 2月19日以降

2月19日の式典の様子は、翌日の新聞などでも紹介されていた。また、【写真8】で紹介している、「2月19日 ダーウィン空襲」と記されたダーウィンの旗は、20日以降も中心部のいたるところにあった。私は21日にダーウィン空港から日本に戻った。空港にはバスで向かったが、空港に行くまでの道にも【写真8】の旗は掲揚されていた。

第3章：戦争捕虜（Prisoners of War, POW）

ダーウィンの海岸部には、戦争捕虜について紹介している碑がある【写真10】。その碑に記されている概要を紹介すると、「第2次世界大戦（1939年～1945年）に22000人以上のオーストラリア人男女が戦争捕虜になった」、「そのうちの多くの人がシンガポール陥落時に捕虜になった」、「1945年8月の日本の敗戦時に、捕虜の3分の1が犠牲者となった」などの紹介がある。そして、「オーストラリアは彼らの犠牲を決して忘れない」と記されている。

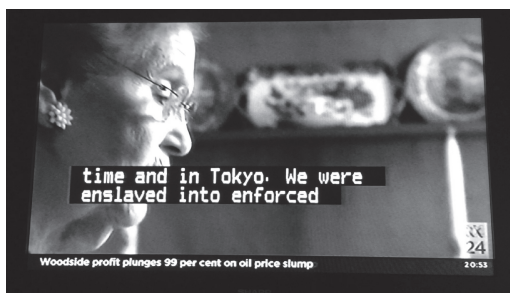


【写真10】戦争捕虜について紹介する碑。上のはうに戦争捕虜(POW)の文字が見える。

第4章：日本軍性奴隷（いわゆる「従軍慰安婦」）

私がダーウィンに来た目的、それは主にダーウィン空襲にかかわる事柄を調べることだった。ところがダーウィンの地で思わぬ出来事に出くわした。

2016年2月17日、ホテルでたまたまテレビを観ていたら、THE WORLDという番組で、日本軍性奴隷の被害者であったオランダ人で、1960年以降はオーストラリアに在住しているジャン・ラフ・オハーン氏が証言をしていた。テレビで彼女は、日本軍により強制的に売春させられたこと（【写真11】【写真12】）、戦時における日本軍の強姦について世界中で活動が続けていること（【写真12】【写真13】）、彼女は安倍首相などが謝罪し、「私が悪かった」と言うことを望んでいること（【写真14】）、それまでは生き続けると発言していた。この番組は、少なくとも夕方と夜の2度、放映されていた。



【写真11】2016年2月17日、THE WORLDという番組で証言する、元日本軍性奴隷の被害者ジャン・ラフ・オハーン氏。



【写真12】2016年2月17日、THE WORLDという番組で証言する、元日本軍性奴隷の被害者ジャン・ラフ・オハーン氏。



【写真13】2016年2月17日, THE WORLD という番組で証言する, 元日本軍性奴隷の被害者ジャン・ラフ・オハーン氏。



【写真14】2016年2月17日, THE WORLD という番組で証言する, 元日本軍性奴隷の被害者ジャン・ラフ・オハーン氏。彼ら〔安倍首相などの政治家〕が謝罪し, 「申し訳なかった」と言うことを望むとジャン・ラフ・オハーン氏が述べている場面。

第5章：なにを読み取るか

(1) 「日本にいる多くの人々は第2次世界大戦についてあまり知らない」

【写真15】は、『ノーザンテリトリニューズ』2016年2月19日付の記事である。真ん中にある小見出しには, 「日本にいる多くの人々は第2次世界大戦についてあまり知らない」と記されている。この記事の内容を紹介すると, 岸田外務大臣と中谷元防衛大臣などは日豪両国の戦略的利益のために日本から潜水艦を輸入すべきことを積極的にオーストラリア政府に働きかけているが, 輸入を進めている潜水艦の名前が, ダーウィン空襲に参加した空母と同じ名前の「Soryu」という名前であること, 「日本人たちは, 潜水艦の名称にどれほど鈍感か, 日本人はほとんどわかっていなかった」との, 歴史家レイビス博士の発言が掲載されている。さらには, 「50歳以下の日本人の多くが第2次世界大戦についてあまり知らない」「日本人の多くが, 日本軍がダーウィ



【写真15】『ノーザンテリトリニューズ』2016年2月19日付。

ンを空襲したことを全く知らない」という、デバイス博士の発言が紹介されている。このデバイス博士の発言に関して、「そんなことはない。日本人は第2次世界大戦の歴史について知っている」と胸を張って私たち日本人は反論できるだろうか？ そして、ダーウィン空襲に参加した空母と同じ名前の潜水艦を積極的に輸出しようとした岸田外務大臣や中谷防衛大臣、彼らを大臣に指名した安倍首相だが、国際社会でどのようにみられるだろうか？ ダーウィン攻撃に関わった空母の1隻が「蒼龍」であることは「軍事博物館」でも紹介されている。たとえば広島原爆投下で使用された「エノラ・ゲイ」と同じ名前の攻撃機をアメリカが日本に輸出しようとしたら、日本人はどう思うだろうか？ 私がこの記事をアメリカ人に見せたとき、彼は「Japanese Should be sensitive」という内容だ」と言っていた。ダーウィン空襲に参加した空母と同じ名前の潜水艦を輸出しようとした、安倍自公政権の行動は「いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」という憲法前文からみて適切な対応なのだろうか？

(2) 戦争捕虜の問題について

ダーウィン空襲などの問題に関わる先行業績である、鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争』（御茶の水書房、2012年）では、「日豪の戦争認識の違いを一番際立たせているのは捕虜問題」³⁾と指摘されている。同感である。「太平洋戦線で日本軍の捕虜となったオーストラリア人将兵は21,700人だが、そのうちの3分の1の7400人あまりが死亡している」⁴⁾。「1941年に当時の陸軍大臣だった東条英機によって公布された戦陣訓に「生きて虜囚の辱めを受けず」とあるが、「捕虜になるのは恥ずかしいことであり、捕虜になるよりは死を選ぶべし」という価値観を軍人たちに教え込んでいた。それは、自軍の兵士の戦場での行動や判断を縛っただけではなく、敵軍の捕虜を軽視し人道的な処遇を怠ったことを意味する」が、その結果、「国際法で認められていた捕虜の権利を無視して敵国捕虜の強制労働だけでなく虐待や拷問が行われたことも多かった」⁵⁾。たとえば映画「戦場にかける橋」で有名な、対面鉄道の建設に際しては、オーストラリア人の捕虜13,004人が働かされ、2710人の死者（21%）となっている⁶⁾。こうした歴史的な事実を直視せず、誠実に向かい合うことをしないで、「国際社会において名誉ある地位を占」めることができるだろうか？

(3) 日本軍慰安婦について

2007年3月16日、第1次安倍自公政権は「閣議決定」⁷⁾で、「軍や官憲によるいわゆる強制連行

3) 田村恵子「日本とオーストラリアの太平洋戦争概史」鎌田真弓編 前掲注2) 文献22頁。

4) 田村恵子「日本とオーストラリアの太平洋戦争概史」鎌田真弓編 前掲注2) 文献22頁。

5) 田村恵子「日本とオーストラリアの太平洋戦争概史」鎌田真弓編 前掲注2) 文献23頁。

6) Rod Beattie, *The Death Railway - A Brief History*, 2015, P. 117.

7) 外務省のHPから引用。http://www.mofa.go.jp/mofaj/a_o/rp/page24_000308.html(2016年11月15日段階)

を直接示すような記述も見当たらなかった」などとしている。しかし、ジャン・ラフ・オハーン氏の事例は、まさに安倍氏の言う「狭義の強制」ではないのか。ジャン・ラフ・オハーン氏が連行された状況を彼女の証言から紹介すると、1944年2月、アンバラワの収容所にいた、17歳以上の独身の娘は全員、直ちに中庭に整列せよとの命令が出された。その命令に対しては、「収容所の全員が懸命に抗議しました。悲鳴と鳴き声と抗議の声で、収容所全体が修羅場と化しました」⁸⁾。しかし「合計16人の娘が、意に反してアンバラワの収容所から無理やり連れだされたのです」⁹⁾。ジャン・ラフ・オハーン氏のこうした発言があるにもかかわらず、日本軍性奴隷の被害者は「無理やり連行されたのではない」と安倍首相などが発言することが、国際社会でどうみられるであろうか？ ちなみにその後のジャン・ラフ・オハーン氏の状況を紹介しますと、連行された翌日、日本人将校は、「おまえたちをこの館に置く目的はただひとつ、日本人将校の性の楽しみのためだ。日本軍人がおまえたちとセックスできるようにするようにな。おまえたちはつねにおとなしくいうことをきくべし」とオハーン氏に言ったそうだ。その発言に対し、「娘たちは全員、稲妻に打たれたように立っていましたが、それから大声で、思いつく限りの身振りをつけて抗議はじめました。そんな目にあわされるわけにはいかない。どんな人権にも反している。ジュネーブ条約に違反している。そんなまねをされるなら死んだほうがましだ。そう訴えました」¹⁰⁾。しかし無駄だった。彼女はその後、数か月にわたり、「天皇ヒロヒトとケンペイタイと軍の最高機関の承認のもとで、毎日、少なくとも10人の日本人に強姦されていました」¹¹⁾。こうした日本の行為について、彼女は軍医に対しても「わたしは心ならずもここにいるのです。収容所から無理やり連れ出されたのです。このことはジュネーブ条約に違反しています。この恥ずべき犯罪を当局に報告してください」¹²⁾と訴えたが、軍医はそうした訴えに耳を傾けるどころか、「軍医は初めて館にやってきた日、獣のように私を犯したのです」¹³⁾。その後、彼女はボゴールの収容所に移されたが、「そこには百人以上のオランダ人女性がいました。全員、日本軍による性暴力の被害者」であり、「全員、それぞれの収容所から強制的に連れ出され、日本人用の娼婦で働かされていたのです」¹⁴⁾。こうしたジャン・ラフ・オハーン氏の悲劇的な状況は、「オーストラリア国立戦争記念館」のHPでも紹介されている¹⁵⁾。にもかかわらず、安倍自公政権のように、日本軍性奴隷の被害者を日本軍が無理やり連行したのではないなどと発言することが国際社会でどうみられるだろうか？ 2016年2月16日、ジュネーブで開催された、女子差別撤廃委員会で政府代表の杉山晋輔

8) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳『オランダ人慰安婦ジャンの物語』（木犀社、1999年）83頁。

9) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳 前掲注8) 文献87頁。

10) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳 前掲注8) 文献96頁。

11) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳 前掲注8) 文献136頁。

12) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳 前掲注8) 文献115頁。

13) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳 前掲注8) 文献115頁。

14) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳 前掲注8) 文献129頁。

15) <https://www.awm.gov.au/collection/P02652.001> (2016年11月15日段階)



【写真16】『ワシントンポスト』2007年3月24日付の記事

外務審議官は、強制連行を裏付ける資料がなかったことを説明すると同時に、強制連行説は「慰安婦狩り」に関わったとする吉田清治氏（故人）による捏造で、朝日新聞が吉田氏の本を大きく報じたことが、国際社会にも大きな影響を与えたと指摘したという¹⁶⁾。こうした態度で、「国際社会において名誉ある地位を占」めることができるだろうか？「名誉ある地位」どころか、国際社会からあざけりと軽蔑の対象にならないだろうか？【写真16】は、安倍晋三の二枚舌（Double TALK）との見出しのある『ワシントンポスト』2007年3月24日付の記事である。この記事では、安倍首相が今月〔2007年3月〕に2回にわたり、「日本軍が女性たちの拉致に関わったことを証明する文書がない」などと主張しているが、朝鮮、中国、フィリピン、その他東南アジアの女性たち20万人が奴隷にされ、日本軍が拉致に関わったこと、この制度の犠牲者たちは彼女たちの恐るべき経験を証言していることなどが紹介されている。そして、「以前の談話〔日本軍性奴隷に対して日本軍が直接・間接的に関与、強制があったことを認めて謝罪した、1993年8月4日の河野談話〕を安倍首相が撤回しようとすることは、主要な民主主義の指導者にとって不名誉なこと（disgrace）」（〔 〕は飯島による補足）と書かれている。こうした記事を書かれる安倍自公政権の対応、果たして適切な対応なのだろうか？

第6章：おわりに

—「オーストラリア人にとっては、太平洋戦争はまさしく対日戦争であった」¹⁷⁾—

「太平洋戦争は、日本では対米戦争であったという認識が一般的には強いが、オーストラリア人にとっては、まさしく対日戦争であった。それまで本土を直接攻撃された経験がなかったオーストラリアにとって、1942年2月から始まった日本軍によるダーウィンを中心とした豪北部地域の空

16) 産経新聞2016年2月16日付（電子版）<http://www.sankei.com/politics/news/160216/plt1602160071-n1.html>（2016年11月15日段階）

17) 鎌田真弓「記憶の国境線を問う」鎌田真弓編 前掲注2）文献2頁。

爆は、衝撃的な出来事だった。それに追い打ちをかけるように、1942年5月末には日本軍特殊潜航艇によるシドニー湾攻撃他さらなる打撃を与えた。予想もしなかった奇襲攻撃だったうえに、シドニーの心臓部である湾内に3隻の小型潜航艇が侵入したことは、人々を恐怖におとし入れた」¹⁸⁾。

日本では、太平洋戦争といえばアメリカとの戦争を念頭に浮かべる人が多いかもしれない。ところがオーストラリアでは、鎌田真弓氏や田村恵子氏が指摘するように、「太平洋戦争」といえば、まさに日本の侵略に対する戦争であった。「日本軍は当時オーストラリア領であったパプア(Papua)、ニューギニア(New Guinea)ばかりか、オーストラリア本土へも攻撃を行った。ダーウィン(Darwin)を含む豪北部の町は空襲を受け、シドニー(Sydney)湾にも日本軍特殊潜航艇が出現した。オーストラリアにとって太平洋戦争は、栄国防衛のみならず、国防のための戦争であった」¹⁹⁾。日本軍がオーストラリア本土を攻撃し、恐怖に陥れた記憶はその後しばらくの間、オーストラリア人の念頭から離れることはなかった。サンフランシスコ平和条約締結の直前、オーストラリアやニュージーランドはアメリカとANZUSを締結した。その理由だが、「1951年結ばれたこのANZUSは、日本の再侵略をおそれるオーストラリア・ニュージーランドがアメリカに安全保障を求めたものである」²⁰⁾。2011年、ダーウィンの軍事博物館にダーウィン空襲の日本側戦死者のリストも掲示しようと歴史家の館長が提案したところ、大きな議論が巻き起こり、「そうした施設内に日本兵の名前を掲げることは依然として強い反発がある」²¹⁾という。私自身、ダーウィンを訪れた時には日本人という理由で不快な思いをさせられたことはなかった。2月19日の式典に参加した際にも、スタッフはにこやかに対応してくれたし、参加者から何か不快な対応をされることはなかった。軍事博物館からダーウィン中心地に戻るとき、オーストラリアの老夫婦と一緒にタクシーに乗ることになったが、そこでも私に対して敵対的な対応ではなく、朗らかに話しながら戻った。ただ、いたるところ日本軍の第2次世界大戦中の行為を紹介する石碑やパネルなどが掲示されており、第2次世界大戦中の日本軍の行為がオーストラリアでも忘れられたわけではないことを、私は2016年2月19日のダーウィンの地で確認することができた。オーストラリアの国立戦争記念館の出口には「死者5000万人—オーストラリア人4万人。戦争は計り知れない苦痛を引き起こした。連合軍の勝利は想像を絶する計り知れない悪を倒した」²²⁾と印字されているという。「想像を絶する計り知れない悪」とはどの国のことなのか、冷静に認識したうえで、オーストラリアとの交流のあり方、さらには国際社会での対応を考えることが必要のように思われる。

また、戦争捕虜や日本軍性奴隷の問題についても、過去を顧みずに歴史を回避するのではなく、

18) 田村恵子「日本軍特殊潜航艇の展示とその変遷」鎌田真弓編 前掲注2) 文献45頁。

19) 鎌田真弓「記憶の国境線を問う」鎌田真弓編 前掲注2) 2頁。

20) 田中直吉『新日米安保条約の研究』(有信堂、1969年) 10頁。

21) 鎌田真弓「記憶の国境線を問う」鎌田真弓編 前掲注2) 文献92頁。

22) 鎌田真弓「国防の最前線：ダーウィン空襲を追悼する」鎌田真弓編 前掲注2) 文献45頁。

過去の悲惨な出来後を直視し、誠実に対応することこそ、オーストラリアをはじめとする国々との真の友好関係を築く上で必要になるのではなかろうか。オハーン氏は「それにしても、よくもまあ日本人は、これらの哀れな凌辱された女性たちのことを「慰安婦」などと呼べるものだと。彼女たち〔韓国の日本軍性奴隷の被害者たち。飯島補足〕の姿をテレビで見ながら、私は思いました、「日本政府は「慰安婦」に謝罪すらしていませんでした。その問題に対してまったく素知らぬ顔をして、日本が何千人という女性に、日本軍のための売春宿で、無理やり売春させた事実すら否定してきたのです」²³⁾と述べている。オーストラリアでベストセラーとなった、ダーウィン空襲を扱った *An Awkward Truth* (2009) を執筆したピーター・グロース氏は「日本、オーストラリア、そしてアメリカは今や同盟国であり、友人同士だ。しかし共通の歴史を直視し、理解しようと努めない限り、その友情も安泰ではありえない」²⁴⁾と指摘する。「ダーウィン空襲」をはじめとする日本軍によるオーストラリアへの攻撃、ジュネーブ条約を無視した、日本軍による捕虜虐待や虐殺、そして「日本軍性奴隷」の問題に関しても、オハーン氏などの被害者の発言などを踏まえたうえで日本として対応することが、「国際協調主義」の視点からも必要のように思われる。

【2016年11月16日脱稿】

23) ジャン・ラフ＝オハーン著、渡辺洋美訳、倉沢愛子監訳 前掲注8) 文献162頁。

24) ピーター・グロース、伊藤真訳『ブラディ・ダーウィン もう一つのパール・ハーバー』(大隅書店、2012年) まえがき iii。